

なぜ日本に「天皇」という文化が生まれ育ったのか

王、皇帝、天皇

「天皇」という言葉と概念が登場するのは、天皇史上もっとも権力が集中した天武帝の御代とされる。文字、都市、法律、その他、中国を規範として国家制度が整えられていく時期であり、天皇文化が中国文化との関係によって成立したことは明らかだ。しかしそのままではない。

民族と文化の激しい戦いが続いた地中海文化と比べ、黄河長江文化には強力な一神教としての宗教が成立しなかった。儒教は道徳に近く、道教の源流となった老荘思想は哲学に近く、宗教ではないという人もいる。つまり比較的宗教色が薄い文化なのだ。しかし「天」という概念に対する尊崇の念は強かった。

それぞれの国を治める「王」を超えて、一つの文化圏としての中国全体を治める「皇帝」という概念ができたのは始皇帝のときだが、以後、中国の歴代皇帝は天帝(天の支配者＝北極星を象徴とする神のような存在)の子として「天子」とされた。「天皇」はこの「天」を含むので、皇帝より上の感覚もあり、形而上学的(宗教的)な意味をより強く含む。

また「天皇」は英語で「エンペラー」と訳されるのだが、西洋における「エンペラー＝皇帝」は、もともと古代ローマの「インペトル」から来ており、政治の実権を握った軍事指揮官の意味が強い。ユリウス・カエサル(ジュリアス・シーザー)がその象徴的人物で、ドイツのカイザーも、ロシアのツァーリもこの「カエサル」を語源とする*2。「天皇」には明らかにそれ以上の神聖感がある。

つまり中国やヨーロッパから見れば、一人の王の領域ほどしかない日本列島が、今なお、皇帝さえ超えるほどの意味をもつ象徴を抱えているということになる。“偉そうなところのある”文化なのだ。とはいえ、王朝が交代する中国(易姓革命)やヨーロッパと比べ、「万世一系」とされるように圧倒的な歴史の長さがあることは事実である。というより「これ(天皇家)だけは変わらない」というのが日本文化の特質である。

現実の歴史においても「天皇」は、政治権力者である期間はほとんどなく、むしろ権力者に担がれる存在であった。その意味で天皇と権力者の関係は、ヨーロッパにおけるローマ法王と各国の王あるいは神聖ローマ皇帝、イスラム圏におけるカリフとスルタンとの関係に似ているが、天皇は、ローマ法王やカリフのような完全な宗教者とはいえない。そこに、権力者でもなく、宗教者でもない、文化主催者としての姿が浮かび上がる。

「家」と「やど」——美意識の象徴

視点を変えて、文学から日本文化と天皇の関係を考える。

日本文学では、住まいを表すのに「家」と「やど」という、同じ意味の二つの言葉がもちいられる。「わがやど」は旅の宿ではなく「自宅」を意味するのだ。『万葉集』において、「家」は「人の空間」、「やど」は「草花の空間」として使い分けられたのだが、『古今和歌集』以後、和歌集の中では必ず「やど」が使われるようになる*3。そして天皇は、その「和歌」という文化の主権者となるのだ。ここに、遣唐使を廃止して中国文化と対等の価値をもつ「日本文化」を定立する意識が見て取れる。つまり「天皇」は、中国の影響を受けながらも中国に対峙するという意識のもとに成立する文化象徴なのである。以後、天皇は「家」という「人の空間＝俗世間」ではなく、「やど」という「草花(花鳥風月)の空間＝美意識」の住人となる。

日本文化に詳しいアメリカ人と議論したとき「日本には思想の代わりに美意識がある」といわれたが、これは慧眼である。つまり天皇には、政治家でも宗教家でもなく、文化主催者としての意味があり、日本の美意識の象徴としての意味があるのだ。しかもそれは、外国の王や皇帝のもつ豪華絢爛の美ではなく、「もののあはれ」や「侘び寂び」といった言葉でも表現される、素朴で清らかな、ある種「清貧」ともいえる美意識である。この点こそ、内外を問わず人々に受け入れられやすい日本天皇制の特質であろう。

世界の哀しみに寄り添う天皇へ

美智子上皇后がつくられる歌には、この伝統文化的な美意識と、戦争も含めた災害犠牲者への哀切の念とが一体化していることを感じる。彼女は、平安王朝の歌人が追い求めた「もののあはれ」という移ろいの美意識を、被災した国民への「哀切」に重ねたのではなからうか。つまり世界の人々の平和と安寧と幸福を祈る上皇、上皇后の姿には、この国の伝統的な美意識の力と、国を超えた哀しみに寄り添う力とが融合した普遍的な文化力があるのだ。

現時点で、日本には天皇を否定する思想も理論も存在しない。われわれは、この世界にも稀な文化象徴を、未永く、より良い方向に、守っていく覚悟が必要である。つまり天皇家とともに国民もまた努力すべきなのだ。革命と大統領制という「完全民主主義」の理念からは外れるところもあるこの制度に対して、世界に理解を求め、大切にすることに共感を得る努力が必要なのだ。近隣国の現実を考えれば、これは簡単なことではない。

戦後、マッカーサー元帥は日本を統治するために天皇を政治利用したというのがもっぱらの評価だが、僕は少し違うものも感じている。彼は、昭和天皇個人あるいはこの類いまれな象徴の制度に、ある種畏敬の念を抱いたのではないか。そこに貴族的な軍人としての美意識が働いたのではないか。「断ち切るにはあまりに惜しい」といったような…。それはルース・ベネディクト、エドウィン・ライシャワー、ドナルド・キーンといった日本文化研究者にも共通して感じられるものだ。

「アメリカ人と天皇文化」という、また別のテーマが浮かび上がるが、それはまた別の機会に書いてみたい。